

## 書評：北窓時男著『海民の社会生態誌：西アフリカの海に生きる人びとの生活戦略』

著者	飯田 卓
雑誌名	アフリカ研究
巻	84
ページ	70-71
発行年	2014-05-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5770">http://hdl.handle.net/10502/5770</a>

## 書評：北窓時男著『海民の社会生態誌：西アフリカの海に生きる人びとの生活戦略』

著者	飯田 卓
雑誌名	アフリカ研究 = Journal of African studies
巻	84
ページ	70-71
発行年	2014-05-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5770">http://hdl.handle.net/10502/5770</a>

北窓時男 著

『海民の社会生態誌—西アフリカの海に生きる人びとの生活戦略』

コモンズ, 2013年, 340頁, ¥3,200 + 税

飯田卓 (国立民族学博物館)

「……人より大きなマハタが釣れてのう。引き揚げるまでが大変じゃった。そのころは目方やのうて、数で魚を売っておった。ピログ〔引用者注：漁船〕に乗せられる魚には限りがあったから、あんまり大きな魚は釣れても逃がしたもんじゃよ。」(81ページ)

昔は海が豊かだったかわり、販路を見つけるのがむずかしく、魚価が安かった。そうした話を、わたしも各地で聞いてきた。しかし、上で引用した話のように、目方でなく尾数で値段を決めたというのには驚いた。われわれは、時代や地域を異にする「ふつうの人びと」(8ページ)のくらしについて、わずかのことしか知りえていない。本書を読んで、あらためてそのことを痛感した。

本書は、大西洋に面したセネガル海岸部にくらす海民についての民族誌だ。ここでいう海民とは、魚を捕る男性(漁民)にくわえて、マングロープの貝類を採取する女性たち、それらを加工する者や販売する者、そして、その周りで間接的に海に向きあってくらす人たちを含んでいる。

サハラ以南アフリカの大西洋側の漁業については、日本語で読める文献が少なく、その意味でも本書は貴重だ。しかも著者は、日本の政府開発援助の一環としておこなわれた開発コンサルタント業務のために現地へおもむき、主として2002年から07年までの滞在で本務をこなすかわり、本書に関わる資料を集めて一冊にまとめた。一般の研究者でも旅行者でもなく、実務家として現地の人びとに投げかけるまなざしは、それ自体として新鮮な印象を与える。民族誌として、あるいは地域研究のモノグラフとして、本書はあらたな境地を示したといっても過言でない。冒頭に引用したエピソードの力強さは、そのことをよく示している。

本書は4部構成になっている。第I部「砂漠の海民」では、大航海時代以前に地中海交易が盛んだった頃から話が始まり、サハラ交易ネットワークの拡大にともなって、ウォロフの一部が漁民集落を形成した背景が述べられる(第1章)。第II部「都市の海民」では、とくにダカール近郊の漁民に焦点を当て、年長者のライフヒストリーを手がかりに漁業の変化を記述し(第2章)、さまざまな階層に属する漁家の家計を分析して経済構造を明らか

にするとともに(第3章)、魚商人の活動の記述(第4章)をとおして、当該地域における漁民の社会経済的立場をきめ細かく叙述した。

第III部「マングロープデルタの海民」では、マングロープという空間の特性を、生態学的観点からのみならず精霊の宿る場所としても記述し(第5章)、とくにエビに着目して、資源量の動向やNGOの取り組みなどを紹介した(第6章)。また、そのことに関わって、女性たちの活動を記すなかから、男性よりも女性のほうが深く地域の資源について経験を蓄積していることを指摘し(第7章)、その女性たちの経験を地域全体で役立たせるため、さまざまなタイプの女性「リーダー」たちがおこなう活動を記述した(第8章)。そして第IV部「海民の社会生態」では、著者が西アフリカと関わるまでにつき合ってきた海域東南アジアと比較しながら、西アフリカの漁民社会の特徴をまとめている(第9章)。

序論の第I部と結論の第IV部をひとまず措いておくとすれば、本書の真骨頂は第II部と第III部にある。とくに第II部の構成はポイントをよく押さえており、これから若手の研究者が民族誌を記すうえでも、おおいに参考になる。たとえば評者は、漁業に関する近年の民族誌が資源管理に記述を偏らせていることを指摘し、仲買の活動に目を向けることの重要性を指摘したことがある(飯田, 2012)。本書の著者は、第II部でそれをみごとに実践し、成功したといえよう。東南アジアの漁業に関してレイモンド・ファースが著した民族誌(Firth, 1966)の伝統を、本書も受け継いでいるようだ。

それに較べると、第III部の構成はまったく異なる。大学に籍を置く研究者なら、第II部で記述した都市漁業と比較するために、第III部のマングロープデルタの漁業でも同じ構成で同じ方法論をとろうとしたはずだ。しかし、著者はそれをしなかった。あるいは、本務をやりとげるといふ制約のなかで、同じ方法論をとろうとしてもとれなかったのかもしれない。結果として第III部は、第II部とまったく異なった読みものになったが、第II部にない味わいが出ており、興味深い。

ひょっとすると著者は、第III部に関する資料を集めるうえで、優等生的な第II部とは異なる方向性を意識的に探ろうとしたかもしれない。そのように評者が思うのは、第III部のテーマがほかならぬマングロープであり、エビであるからだ。東南アジアでのマングロープ研究といえば鶴見良行、エビ研究といえば村井吉敬の名が思いだされる。いずれも、東南アジア研究を進めるうえで、著者が薫陶を受けてきた研究者だ。じっさいに第III部では、鶴見と村井に共通する「歩く」という方法論が、第II部にもまして精彩を放っている。網羅的

に地域を提示しようとする第Ⅱ部と対照的に、足のおもむくままに歩いて出会ったことがらが、第Ⅲ部のさまざまな着想に結実したのではないか。その意味で、第Ⅲ部は第Ⅱ部ほど緻密ではないかもしれないが、著者の本領がいかに発揮されている部分といってよい。

そのようにみても、結論にあたる第Ⅳ部ではたしかに、第Ⅱ部よりも、第Ⅲ部に関わる調査で得た洞察が活かされている。もっとも主要な洞察は、第Ⅲ部に関わる調査で著者を迎え入れてくれた人たちが、インドネシアのスラウェシ島で受け入れてくれた人と同じように、真摯さと暖かさを備えていたということだった。偶然の一致として済ませてしまいそうなこの共通性を、著者はことさらに重視し、「開放系のかかわりのエトス」と名づけている(304ページ)。

海をつうじて人が不断に移動してきた海域東南アジアと、砂漠や海をつうじて人が移動してきた西アフリカは、いずれも、出自や背景を異にする人びとが相互に結びつくことで発展してきたネットワーク型社会だ。そうしたところでは、「旅人ならば誰でも知らない村に着いたら自己紹介し、『私は神があなたに贈った客人です』と言えさえすれば、歓迎して泊めてもらえたのである。人々は旅人を一番よい部屋に通して、一番良いベッドに寝てもらい、一番おいしいご馳走を食べてもらうのだった」(303ページ、初出は北窓、2001)。

とはいえ、著者自身も再三強調するように、ふたつの地域では違いも大きい。もっとも大きな相違は、西アフリカの自然と歴史が過酷なことだ。西アフリカの海では、カナリア海流(寒流)や大陸棚の小ささなど、いくつかの要因が相乗的に作用した結果、生物資源や海産商品が東南アジアほど多様でない。それに加えて、西アフリカの諸社会を潤していたサハラ砂漠横断交易のネットワークが、ヨーロッパ人の海洋進出のために分断され、衰退してしまった。この点は、東南アジアの海上交易者が今なお活発であり、国家による統治を無視するかのように国境をまたいで活躍するようすと対照的だ。

そのことと関係するのかもしれないが、両地域の違いがもうひとつある。同じマングローブ海域の水路を通っても、東南アジアではさまざまな定置式の仕掛けがみられるのに対し、西アフリカではそれがみられない。資源の豊かさという点ではそれほど大きく違わないと思われるのに、なぜなのか。それは、東南アジアの人びとが他人をだし抜いて機転を利かせることをよしとするのに対し、西アフリカでは構成員の平準化を求める傾向にあるからだという。このことを論じるうえで、著者は、昨年物故した掛谷誠が提唱した平準化メカニズム論をひき合いに出す。

外部からの情報に価値が置かれる点で、西アフリカの海民社会は海域東南アジアと共通しており、その点で開放系ネットワーク社会と呼べる。ただ、東南アジアとは違って、外部の情報を入手するようリーダーたちの働きが期待され、リーダーはそれを内部者たちと共有するよう求められる。掛谷の議論によると、平準化の対象は主として、生業を通して得られるさまざまな有形資源だった。しかし西アフリカでは、外部とわたり合うための有形無形の資源が平準化の対象になりうるという。東南アジアを歩いてきた著者ならではの、ユニークな洞察といえる。

もちろん、細かい点で疑問がないわけではない。平準化に関する議論が西アフリカにあてはまるとするならば、歴史的に複雑な王国組織を築いてきた事実をどのように説明するのか。また、外部との交渉がこの地域では盛んだと著者は述べるが、ほんとうにそうした状況は、長い歴史をつうじて一貫していたのだろうか。この地域では、男性が出稼ぎ漁に出かけてしまうと、女性だけが村に残される。その結果として、援助団体がとくに意識的にこの地域で活動したからこそ、外部との関わりが比重を増しているだけではないのか。

こうした疑問は、東南アジアと西アフリカのホスピタリティを響きあうものとしてとらえる、アブダクションとでもいうべき方法にも向かう。アブダクション自体は近年の文化人類学で市民権を得ているようだが、地域経済や地域開発といった分野では、緻密にデータを積みあげる実証性が依然として重んじられる。できることなら、もう少し説得的なデータから、上記のことを示してほしかった。

とはいえ、地道な観察が本書の重要な記述を支えていることはまちがいない。そこから出発して、海域東南アジアと西アフリカの比較にまでいたる壮大なヴィジョンは、本書の大きな魅力になっている。類をみないユニークな著作として、ぜひ一読をお勧めしたい。

## 引用文献

Firth, Raymond (1966) [1946] *Malay Fishermen: Their Peasant Economy*. London: Routledge & Kegan Paul.

飯田卓(2012)「漁師と船乗り——マダガスカルとモザンビークにおける漁村伝統の対照性」松井健・野林厚志・名和克郎(編)『生業と生産の社会的布置——グローバリゼーションの民族誌のために(国立民族学博物館論集1)』岩田書院, pp.125-148.

北窓時男(2001)『熱帯アジアの海を歩く』成山堂書店。